

# 令和7年度 小平市立小平第十三小学校 学校評価報告書

**学校教育目標** 21世紀をたくましく生きる子どもたちを育てることを目指し、以下の教育目標を設定する。  
 ◎自ら考え行動する子ども(重点目標)・仲良く助け合う子ども・明るく元気な子ども

**目指す学校像(ビジョン)**

- 【目指す学校像】 子どもたちのみならず、教職員・保護者・地域が、「自ら学び、かかわり、他と共に」を共有しながら、自己の向上を図り、共に育てる拠点としての学校。
- 【目指す児童・生徒像】 自ら学び、かかわり、他と共に生きる子ども
- 【目指す教員像】 自ら考え行動し、常に研鑽を積み、自己の向上を求め続ける教職員

**前年度までの学校経営上の成果と課題**

【成果】特別活動の研究を通じた学級会の展開の仕方、たてわり班活動やクラブ活動など異学年交流の工夫などにより、自分の考えを大切にしたり、発信したりできるようになった児童が増加した。  
 【課題】全校で統一したあいさつの仕方の実施や生活のきまり「スマイル13」のさらなる発信などにより、授業規律や学校生活上のきまりを守ろうとする姿勢の改善が必要である。

	具体的方策	第1回評価		指標に基づく成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	指標に基づく成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
学力向上	①授業規律の確立 ②児童が相互に学び合い高め合う授業の日常的な実践 ③学習者用端末を中心としたICT教育機器の活用と研修の充実 ④授業アンケートの実施 ①学習補助員や地域人材の活用と個別指導 ②東京ベネッセ・ドリルや学習アプリの活用 ③習熟度別によるきめ細かい算数科の指導 ④家庭学習の実施と充実(低学年30分 上学年10分×学年)	3	1	授業規律やホワイトボードの活用について全教職員で周知したことで、各学級で浸透している。 学力テストの結果、知識・技能の力(平仮名、漢字、かけ算九九等)が低いため、朝学習や授業中に学習アプリや東京ベネッセドリルを活用したり、保護者に家庭学習への協力を仰いだりしている。 資料の提示、児童の考えの共有など、様々な場面で学年の実態に応じて学習者用端末を活用できている。 診断シートを2年生以上の学年で学期ごとに実施し、学力の定着度を把握し、算数の授業改善を図る。	3	1	・取組指標と成果指標が「2」も離れてしまうのは、成果指標の基準の見直しが必要と感じる。 ・計算や漢字などがきちんと定着していない児童に対して、放課後の勉強会や学習アプリの活用、保護者・地域との連携など、様々な対応が必要と感じている。	・全学級共通の授業規律(挨拶の仕方等)やホワイトボードの活用により、児童が見通しをもって授業に臨むことができた。 ・学年の実態に応じて、スマイルドリルやロイノートなどの学習アプリを活用した。ワークテスト(国語・算数)の到達率80%を達成できた学級は全体の3割であった。来年度は今年度把握した児童の実態を基に、成果指標を見直すとともに、授業改善を図っていく。 ・習熟度別の算数の授業では、教員と学習ボランティアの連携により、学習支援が必要な児童に対して丁寧に対応することができ、理解の向上につながった。
健全育成(いじめ防止)	①ふれあいアンケートの実施と分析 ②いじめ防止にかかわる道徳授業の実施(年3回以上) ③特別活動を中心としたよりよい人間関係形成を重視した活動の充実 ④いじめ防止校内委員会の充実 ⑤生活のきまりの活用 ⑥あいさつ運動の実施 ⑦サポート会議の活用 ⑧委員会・クラブ・たてわり班活動の充実 ⑨全教職員が週1回以上の学校ホームページ更新	3	3	ふれあい月間のアンケートの結果や生活指導主任によるこまめな学級担任への児童の様子の聞き取りから、課題を把握し、学校全体でいじめの未然防止に取り組んできた。細かい事案にも早期対応、解決が図られている。 学期始めや保護者会の際に「生活のきまり」を児童・保護者と確認し、校内での過ごし方や持ち物の共通認識を図ってきたことで、児童は落ち着いて生活できている。 週に1～2回以上学年のホームページを更新し、学校の様子を発信している。	3	3	・いじめに対する教員の意識がとて高まっているので、早期発見ができていていると感じる。 ・いじめを無くすことは難しいが、教員だけでなく、家庭にも協力を仰ぎ、風通しの良い関係を築くことでトラブルを回避できると感じている。 ・いじめ対策委員会や生活指導連絡会を通して、いじめの早期発見・周知・早期解決に全教職員で取り組むことができた。生活指導上の問題への対応として、各学級担任による生活態度や持ち物等の児童への周知、生活指導主任による全校への呼び掛けをこまめに実施した。これらの取組により、いじめは9割以上解決している。 ・あいさつ運動の方法を工夫し、学校全体でのあいさつの向上につながっていく。 ・週に1～2回のホームページの更新が学校全体(管理職・学級・専科等)で達成できるように、来年度は週末にホームページ担当が確認し、更新していない場合は声掛けをしていく。	
特別支援教育	①特別支援教室の効果的運営□ ②特別支援巡回指導の活用□ ③個別指導計画の作成と活用□ ④特別支援校内委員会の効果的運営□ ⑤こぼれ支援シートの活用□ ⑥児童一人一人の正確な見取り□ ⑦「にこだいらこれだけは」に基づく環境の整備(ホワイトボードの活用、教室前面の掲示板等)□	3	3	巡回指導教員の授業観察の際に、通級児童のみだけでなく、気になる児童も多く見てもらい、必要に応じて個別指導計画を作成し、学校全体で情報を共有できるようにした。一人一人への組織的な対応を今後も継続する。 生活指導連絡会を通級指導日に移し、通級指導の教員とも支援が必要な児童や特別支援校内委員会で話し合った内容の共有を図っている。 学期中や夏季休業中に、特別支援教育に関する研修を実施し、教員の理解を深めた。	3	1	・特別支援教育に関する情報が、全家庭の保護者が周知できるように発信の仕方の工夫が必要である。 ・中学生になってからのフォローでは間に合わないので、小学生の内にもきめ細かく対応してもらいたい。 ・生活指導連絡会、特別支援校内委員会、児童理解研修を通して、支援が必要な児童の情報共有がされ、補教の際の支援、特別支援教室への入級につなげることができた。年々、支援が必要な児童の保護者の要求や問い合わせが増えているため、次年度に向けて引き続ききめ細かく行う。 ・特別支援教育に関する保護者アンケートの結果では、肯定的な回答が5割、「わからない」との回答が2～3割のため、保護者に内容が伝わるように発信する工夫が必要である。	
体力の向上	①休み時間の校庭での活動計画 ②なわとびやマラソンの実施と取組強化 ③裸足の運動会の実施に向けた取組の充実 ④体力テストの結果を基にした体育の指導の工夫 ①様々な感染症への理解と予防の徹底 ②「早起き、早寝、朝ご飯」の啓発活動 ③基本的な生活習慣の確立 ④栄養士と学級担任による食育の授業	3	3	休み時間に教員が積極的に校庭に出たり、計画的に学級レクを実施したりした。 学校全体としての体力テストの結果は、全国、東京都共に平均を上回っていた。ただし、物をつかむ力や敏捷性が平均以下なので、2学期以降に体育の学習を通して、力を伸ばしていきたい。 全校共通の給食指導や、栄養士との食育授業、出前授業などを通して、食の大切さを指導し、児童の食に対する意識が上がっている。	3	2	・体力向上に向けた取組や教員が休み時間に外で児童と一緒に遊ぶことなどが、良い効果を生んでいる。 ・栄養士による長期休業中の過ごし方の指導が工夫されている。 ・「体力向上」に関する児童アンケートの肯定的な回答は78.7%であった。芝生の校庭の積極的な活用(休み時間、学級集会、レク集会等)により、体を動かす児童が増え、体力の向上につながった。 ・栄養士による食育授業や出前授業が計画的に実施することができ、学校全体の食への関心の高まりにつながった。保健の授業以外にも、養護教諭の保健指導や学校医の出前授業により、児童が健康について学ぶ機会が多かった。	
ライブラリースタック	①C4thの積極的な活用 ②月4回の定時退勤日の設定 ③教員の年次有給休暇の15日取得 ④教員の残業時間月平均45時間以内 ⑤管理職の積極的な休暇取得 ⑥副校長補佐の計画的・積極的な活用 ⑦スクール・サポート・スタッフの計画的・積極的な活用 ⑧働き方改革に向けた、教員自らの目標設定と実践	3	3	C4thやクラスルームの積極的な活用により、印刷時間の減少や情報の共有化、連絡会の時間の短縮につながった。 学期内の会議の内容の精選・削減により、教職員が積極的に年次有給休暇を取ることができた。 繁忙期を除く水曜日に定時退勤日を設定し、より年次有給休暇の取得を増やしていきたい。 スクール・サポート・スタッフやエデュケーションアシスタントの積極的な活用により、教材研究や校務分掌に取り組む時間が増えた。	3	3	・地域には様々な人材があるので、教育活動にさらに活用してもらいたい。 ・教員の時間的な余裕が、児童への細やかな対応につながると思う。 ・C4thやクラスルームの積極的な活用、会議の削減により、教職員が年次有給休暇を取りやすくなった。しかし、情報の共有が不十分なのもあったため、紙媒体の資料の配布や会議の必要性も出てきた。 ・スクール・サポート・スタッフやエデュケーションアシスタントの積極的な活用が、教員が児童と触れ合う時間や教材研究・学校行事への準備の時間の確保につながった。しかし、教員の事務的な仕事量は多く、なかなか定時退勤につながらない。残業時間月平均45時間以内の教員も休日に学校に来て仕事をしたり、家庭に持ち帰って仕事をしていたりする者もいる。	